



和装家に 聞く

今日の和装家は横田晴美さん

(聞き手／四季誌和装家編集長・佐藤正樹、ヘアメイク／和装家家元・齋藤久代さん)



〈芭蕉布のコーディネート〉
「小千谷縮」に重要無形文化財の「喜如嘉の芭蕉布」の帯を合わせて

本人は患者さんと「ゆつくり繋がりたい、関わりたい」との想いが募ったようだ。その想いが、救急外来の看護師を続けながらのワーク起業を果たし、現在、訪問看護ステーションの経営をしていることに繋がっている。人のためにという想いは続き、輝きを増している。

横田さんの人格を見る出来事が平成10年と30年に起こっている。

平成10年は火災の際の人命救助で表彰された。表彰状に書かれた「身の危険を省みずに人命を救助した」という言葉に、当時の「勇敢

さ」が垣間見られるが、その後、この機会に触発され、救命救急の勉強会に参加のちに講師となる、これが20年後の再度の救命劇に繋がっていく。

その様子はホームページで紹介されているので、別記のQRコードから見えてほしい。もちろん医療従事者として「当然のこと」とも言えるが、設備のない発生現場での救命活動は、制約も多く、場合によっては責任が問われることになりかねず、簡単にできることではない。まさに人格が問われるシーンで、横田さんはその役

割を堂々と果たしている。

最後に、横田さんにとっての「きもの」とは？と聞いてみた。「私から看護師としての存在を取っちゃうと、何もないんじゃない？って思った時、私にはきものがあるって意識したんです。きものは私のアイデンティティなんです」。

なお、きもの好きの遺伝子は祖母からの隔世遺伝らしい。

恩師・齋藤家元については「生徒は皆、芸術家として先生のファンになってしまいうから、ずっと繋がっているんです」と、お茶目な笑顔をみせてくれた。

「身の危険を省みずに人命を救助」した快女子の アイデンティティは「きもの」

最近、政界や経済界では、一本筋が通った好漢、快男児と呼べる方々が、めつきり少なくなったが、普段の生活や仕事のシーンで、毎日快女子と呼べる人に出会うことがよくある。狭山市の消防長に「身の危険を省みずに人命を救助した」と言わしめた、今日の和装家、横田晴美さんもそのお一人。

看護師として毎日のように命に関わり、救いながら、プライベートでも救命に突っ込んでいく、その一方でニューヨークでもの姿でピースサインをする横田さんの「心意気」と「お茶目さ」に迫ってみた。

高校2年の時、たまたま短期間、祖父の介護をしたことで「人のためにになりたい。

けつこう自分に向いてる」という気持ち芽生えたそう。その後、母親からの強いススめで見護師の道へ。地域の中心病院で看護士として活躍するも、管理者としての能力を見出され、様々な

部門で「人の能力を引き出すこと」になる。人柄は普段の仕事に表れ、人格は緊急時の対応力と言われるが、母親も病院のリーダーも、横田さんの人柄を見抜いていたように思う。ただ、



〈今日のコーディネート〉
夏牛首に友禅描きの付け下げは約10年前にとなみ織物で購入されたそう。「ここぞという場面で頼りにしています」。帯は5年前に迎えた加納幸の祥雲錦。「立体感と淡いピンクの色合いがお気に入り」。

〈横田さんのきものメモリーズ〉

初めての「きものでお出かけ」(齋藤家元と)

第1回プリリアンツ全国大会に出場(出演)

第6回きものプリリアンツ全国大会「ファイナリスト証明書」

あなたは、2013年8月7日、東京都千代田区で行なわれたプリリアンツ全国大会決勝ステージにおいて、最優秀賞を受賞されたことを、ここに証します。

2013年8月7日

日本和装ホールディングス株式会社
代表取締役社長 吉田 康久

第6回プリリアンツ全国大会でファイナリストに

表彰状文面から、まるで、映画のシーンのような「救命劇」があったことを思わせる平成10年の火災、人命救助。

表彰状

横田 晴美 様

あなは平成二十年八月十日、埼玉県蕨市において、火災発生時に、人命救助に尽力し、人命を救ったことにより、表彰状を授けらる。

平成二十年八月十日

消防庁長官 山崎 博

火災救命から20年、
またしても「一命を救う」
詳しくは埼玉西部消防組合のホームページへ

撮影は「さいたま新都心」で。齋藤家元とは日本和装さんの教室を通じて20年来のお付き合い。

